日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

看護学実習前演習に地域住民が模擬患者（Simulated Patient：SP）として参加することの意義に関する研究（第２報）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2019-03-22 キーワード (Ja): 地域住民, 模擬患者（Simulated Patient：SP）, 意義, 看護学実習前演習, フォーカスグループインタビュー（Focus Group Interview: FGI） キーワード (En): local residents, Simulated Patient, significance, clinical skills laboratories, focus group interview 作成者: 阿部, オリエ, 本田, 多美枝, 小手川, 良江, 中平, 紗貴子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000557

著作権は本学に帰属する。

報告

看護学実習前演習に地域住民が模擬患者（Simulated Patient：SP）として参加することの意義に関する研究（第２報）

阿部　オリエ[1)]　本田　多美枝[1)]　小手川　良江[1)]　中平　紗貴子[2)]

本研究の目的は、看護学実習前演習に地域住民が模擬患者（Simulated Patient: SP）として参加することにどのような意義があるのかを明らかにすることである。研究デザインは質的記述的研究とし、地域のコミュニティを通して集まっていただいた地域住民11名にフォーカスグループインタビューを実施した。その結果、以下の３点が明らかとなった。

1. FGIの結果より、地域住民がSPとして演習に参加する意義として、【学習過程にある看護系大学生を知る機会】【学生の看護技術を学ぶステップを知る機会】【学生の将来像をイメージし、看護師に期待する要望を伝える機会】【気軽に演習に参加できる機会】【肯定的な感情を生み出す機会】【私事として健康について学習する機会】という６つのカテゴリーが抽出された。
2. 【学習過程にある看護系大学生を知る機会】、【学生の看護技術を学ぶステップを知る機会】、【学生の将来像をイメージし、看護師に期待する要望を伝える機会】というカテゴリーは、SPが看護系大学の演習に参加し、学生と双方向のやり取りを行い、看護教育に直接触れることで得られた意義であると考えることができる。
3. 【気軽に演習に参加できる機会】、【肯定的な感情を生み出す機会】、【私事として健康について学習する機会】というカテゴリーは、演習に参加し患者疑似体験をしたことで、自身の健康を考える機会としての意義があったと考えることができる。

キーワード：地域住民、模擬患者（Simulated Patient：SP）、意義、看護学実習前演習、フォーカスグループインタビュー（Focus Group Interview: FGI）

Ⅰ　はじめに

看護基礎教育における模擬患者参加型教育は、学生の看護実践能力を高めることができる教育方法として広がりを見せている。模擬患者参加型教育の教育効果として文献研究を行った本田らは、学生は看護のリアリティを疑似体験し感情を揺さぶられ、学習姿勢が変化することを明らかにした[1)]。また江川らは、初対面の模擬患者を相手にして看護のリアリティを疑似体験することで、戸惑いながらも否応なしにさまざまな気づきを得ることができる[2)]としている。このように、模擬患者参加型教育は、看護学生にとって看護のリアリティを学ぶ上で効果的な教育方法といえる。

模擬患者参加型教育における模擬患者とは、1960年代前半にアメリカの医学教育に導入され、1970年代ごろ「標準化された模擬患者（Standardized Patient）」へと進化したとされている[3)]。その変遷を辿ると、模擬患者はSimulated PatientとStandardized Patientの２種類に分けられ、後者はOSCEなど臨床試験に活用されていることが先行研究より明らかにされている[4)]。1990年頃には、看護教育にも模擬患者が導入され始め、本田らは、模擬患者の活用は演習および看護技術試験の２つに大別され、基礎看護学実習開始前の１、２年次に集中していることを明らかにした[5)]。これらのことから、A看護大学においても、学生が対象を受け持ち看護過程を展開する実習前の演習に模擬患者を取り入れたいと考え、模擬患者参加型演習を企画した。その際、どのような方法が適切かを検討する必要があると考えた。原島らの研究では、模擬患者には一定の訓練が重要であることが指摘されていた[6)]。また、阿部は、模擬患者のトレーニングプログラムを作成して十分な練習を実施している模擬患者研究会は、全国でも１割程度であり、模擬患者の質・量ともに

1）日本赤十字九州国際看護大学
2）元日本赤十字九州国際看護大学

さまざまであることを明らかにした[7]。これらのことより、模擬患者を導入するには、一定の訓練が必要であり、訓練を実施しないと質を一定化することができず、学生の教育効果に差が生じることが示唆された。また、模擬患者を導入することへの課題として、複数の模擬患者との打ち合わせ、他教員との評価の共有、道具の準備等非常に手間がかかる[8]とされており、模擬患者導入に関する費用の問題[9]、模擬患者自身の精神的負担感[10～12]、模擬患者や教員の質の確保が難しい[13]ことなどが先行研究より明らかにされていた。これらのことより、模擬患者導入に関しては考慮しなければならない課題が山積していることが明らかとなった。一方で、課題は多くても、模擬患者養成に関しては看護基礎教育機関においても関心が高く様々な取り組みが始まっていた。具体的には、模擬患者を地域住民が担い、ボランティアとして養成されていたり[14～17]、交通費や謝金を支払って模擬患者を養成している機関も存在している[18]といった状況であった。山本らは、模擬患者（Simulated Patient）に求められる資質として、「連続的な自己内省」や「リアルな患者の探求」、「学生と向き合うスタンス」が必要なことを明らかにし、「自立的な組織力」が求められることを明らかにした[19]。また、杉原らは、模擬患者養成の今後の課題として、模擬患者にとってより意義のある活動になることを挙げている[20]。しかし、模擬患者に関する研究において、模擬患者は、養成を前提とされていることが多く、実習に向けてつなぐことを目的とした演習という模擬患者参加型教育において、参加する模擬患者側にとってどのような意義があるのかについて具体的に言及している文献は見当たらず、詳細を明らかにする必要があるのではないかと考えた。

このような経緯をふまえ、筆者らは地域住民を模擬患者（Simulated Patient：以下 SP とする）とした看護学実習前演習を企画し、実施した。そこで筆者らは、参加した SP にとってはどのような意義があるのだろうかという問いを基に、看護学実習前演習に地域住民が SP として参加することの意義を明らかにすることを目的に調査を実施した。その結果、看護学実習前演習に地域住民が SP として参加することの意義は、【SP 参加型教育における授業改善への示唆】と【地域住民への健康教育の機会】であり、加えて、SP の語りは、【学生に対して否定的な反応】から【学生に対しての肯定的な反応】へと変化し、【看護職への期待】が生じ【自己の健康観や役割意識】といったポジティブな変化が経時的変化として表れることを明らかにした[21]。しかし、1 回の看護学実習前演習に参加した限られた対象での調査であったこと、加えて、授業改善への示唆という教育者側への意義が明らかとなり、地域住民が SP として看護学実習前演習に参加することによって、地域住民自身にどのような意義があるのかについては、更に対象者数を増やしデータを蓄積する必要があると考えた。

１．目的

本研究の目的は、看護学実習前演習に地域住民が模擬患者（Simulated Patient：SP）として参加することにどのような意義があるのかを明らかにすることである。

２．意義

本研究では、養成を前提とする SP 参加型教育において、養成を前提としない SP 参加型演習が SP 自身にどのような意義があるのかについて、新たな知見を提示することができると考える。また、養成を前提としない住民参加型の SP 参加型教育において具体的な示唆を得ることができると期待される。

３．用語の定義

SP（Simulated Patient: SP）：看護教育における SP と は、Simulated Patient と Standardized Patient に分けられる[22]とされている。 本研究における SP とは、「standardized patient ではなく、地域のコミュニティを通して参加した健康な地域住民」と定義する。

意義：「意義」とは、ある言葉によって表される内容。その言葉に固有の内容・概念。かつ、ある言葉が表す内容および物事が他の物との関係において持つ固有の重要な価値[23]とされている。また、同義語として「意味」があり、「意味」とは、言語や行為によって示される内容、また物事が持つ価値をいう。本研究の目的は、看護学実習前演習に地域住民が模擬患者（Simulated Patient：SP）として参加することにどのような意義があるのかを明らかにすることであるため、意義を「言語によって表される内容および演習参加によってもたらされる価値」

と定義する。

Ⅱ　研究方法

1．研究デザイン

質的記述的研究

2．研究期間

2012年7月30日～9月28日

3．研究参加者

SPとして演習に参加した地域住民11名

4．演習内容

1）本演習の位置づけ：本演習は、2年前期に開講される「看護過程」と、9月に行う「看護過程の展開実習」を段階的につなぐ演習としての位置づけである。「看護過程の展開実習」は、実際に患者を受け持ち看護過程を展開する初めての実習であり、実習前の学生の緊張は強い状態であった。そのため、実習前演習にSPを導入し、看護過程の「第一段階：アセスメント」から「第五段階：評価」までの一連を実習前に経験することや、臨床に近い状態での対象者とのコミュニケーション等を経験できるように本演習を設定した。

SPは、地域のコミュニティ代表を通して募集した。その際、演習の目的と方法、注意点に関して説明書を配布した。

2）演習目的：事例における対象者のニーズを捉え、計画した看護援助を実践し評価する。

演習事例：「看護過程」（2年前期）の授業で学生が「アセスメント」から「計画立案」までの看護過程を展開した「左大腿骨頸部骨折、介達牽引中である70歳代の女性」の事例。

演習場面：検温のために看護師が訪室。体温37.3度であるが気分不良はなく「汗をかいて気持ちが悪い」との訴えがあった。学生は、アセスメントと立案した看護計画をもとに、この場面での看護援助を行うこととした。

3）演習概要：表1の演習概要に沿って演習を実施した。SPへはSPを依頼する際に、演じてもらう患者の特徴や症状および、学生の援助に対して率直な反応を返してもらうように説明書を配布した。実際の演習の場においてSPは、寝衣に着替え、ベッド上に休んでもらい左下肢に介達牽引を実施してもらった。介達牽引は、重錘を水入りの500mlのペットボトルで代用し弾性包帯で固定したものを使用した。その際、学生からの援助や問いかけに対する返答などは、セリフを決めず、患者の立場からの意見や感想を率直に述べてもらうようにした。

表1　演習概要

時間	スケジュール	SPへの依頼事項
10分	ガイダンス	
5分	<1グループ目演習> 援助の目的・内容・根拠について説明　※1	※1　一人のSPが学生2グループを担当。1グループ目と2グループ目で同じ看護場面を演じてもらった
25分	SPへの看護実践　※2	※2　セリフが決まっているのではなく、学生の援助に対して感じたままの反応を返してもらった
25分	ディスカッション SPからのフィードバック　※3	※3　学生の援助に対して患者の立場からの意見や感想を率直に述べてもらった
10分	休憩	
5分	<2グループ目演習> 援助の目的・内容・根拠について説明	
25分	SPへの看護実践	
25分	ディスカッション SPからのフィードバック	
30分	演習の目的・目標に対する振り返り	
	質疑応答（担当教員）	
	技術練習等	

５．研究方法

１）データ収集方法

演習終了後、SP には別室に集まってもらい、インタビューガイドに基づきフォーカスグループインタビュー（以下 FGI と略す）を実施した。FGI を採択した理由は、グループ内でのやりとりによって参加者が自分の意見を述べやすくなること、FGI は４～12 名の参加が適切とされており研究参加人数が妥当であること、SP 体験を共通の経験として集まってもらうことで均一性の高いグループとなること[24]を考慮し、本データ収集方法を採用した。FGI のインタビューガイドは、演習参加の感想、SP 自身が考える演習参加の意義、今後の演習への参加希望を問い、SP 自身のグループ内でのやりとりの中で語られた率直な意見をデータとして収集した。

２）分析方法

谷津[25]の手法を参考にインタビューデータから逐語録を作成し、研究者間で質的内容分析を行い、コード化、サブカテゴリー化、カテゴリー化を行った。分析にあたっては、研究者間で繰り返し意見交換を行い、結果の真実性・信憑性を確保できるようにした。

６．倫理的配慮

A 大学研究倫理審査を受けて調査を実施した（承認番号 12-13）。研究参加者には、文書と口頭にて研究の主旨を説明し、個人が特定されないように配慮を行い、同意を得られた場合のみ研究の対象とし同意書を得た。インタビュー時は、賛同が得られたためボイスレコーダーに録音した。研究辞退の申し出は、いつでも受け付けることを説明し、説明文に連絡先を記載した。

Ⅲ　結果

１．研究参加者の背景

演習に参加した SP11 名全員から同意が得られインタビューを実施した。所要時間は 50 分であった。SP は全て女性であり、年齢層は 50 歳代２名、60～64 歳２名、65 歳以上７名であった。また、普段は主婦役割を担いつつ地域活動に参加しているという方々であった。A 大学の演習に SP として参加経験のある方が２名存在し、筆者らの前回の研究[26]参加者が１名存在した。

２．SP へのインタビュー結果

SP への FGI によって得られた質的内容分析の結果を表２にまとめた。結果より、25 のコード、11 のサブカテゴリー、６のカテゴリーが生成された。以下、生データを「　」、を〈　〉、サブカテゴリーを『　』、カテゴリーを【　】として表し、結果を示すこととする。

１）生データをコード化する過程

インタビューの冒頭では、学生と関わり始めた直後の感想が語られた。「学生さん、どう関わっていいか分からなかったみたい」「学生さん、声が小さくてよくわからなかった」などの反応から、〈学生の SP に対する関わり方への戸惑い〉というコードが生成された。「まだ、人生 19 年しか生きてないから、分からないだろう」「これから患者さんとのかかわりを考えてもらわなくちゃならない」と言ったような〈患者に関わることに慣れていない学生〉というコードが生成された。「結構、緊張しておられたと思います」「あんなに緊張してびっくりした」という反応には、〈学生の緊張への驚き〉が見られた。「血圧測った後、何も言わない」「私の方から、128 の 70 くらい？と言ってみた」という言葉より、〈学生の説明不足や内容がはっきりしないことへの戸惑い〉、「血圧上手に測れないみたい」「測らない人もいた」「身体を拭いたタオルがぬるかった」などの言葉が語られ、〈学生の看護技術が至らなかった点に対する気づき〉というコードが生成された。SP へのインタビューの中で、骨折した対象への理解やイメージすることの難しさなどが話題に挙がった際、「病院と看護学校が近くにあったら、そこですぐに実習とかできて見に行けるんだろうけど、ここなんか、病院がないから大変ですね」という発言があり、〈学校と病院が離れていることによる大変さの気づき〉というコードが生成された。「よく勉強して感心する」という発言からは、〈よく勉強している学生への感心〉というコードが生成された。

続けて、「よう頑張っとるよね」「できんでも一生懸命だもんね」などの反応から、〈学生と直に接することで見えた学生の頑張り〉というコードが生成された。また、「笑顔がかわいい」「優しくてありがたかった」という反応から、〈学生の笑顔、優しさ

表２　SPへのFGIによる質的内容分析の結果

〈コード〉		『サブカテゴリー』	【カテゴリー】
1	学生のSPに対する関わり方への戸惑い	学生の反応より生じたSPの戸惑い・驚き	学習過程にある看護系大学生を知る機会
2	患者に関わることに慣れていない学生		
3	学生の緊張への驚き		
4	学生の説明不足や内容がはっきりしないことへの戸惑い		
5	学生の看護技術が至らなかった点に対する気づき		
6	学校と病院が離れていることによる大変さへの気づき	学習困難な状況でもよく勉強している学生	
7	よく勉強している学生への感心		
8	学生と直に接することで見えた学生の頑張り	学生の頑張り・優しさに触れたことでの気持ちの変化	
9	学生の笑顔、優しさへの感謝		
10	学生が清拭を学ぶステップへの驚き	清拭を学ぶステップへの驚きと学生の看護技術の素晴らしさの体感	学生の看護技術を学ぶステップを知る機会
11	学生の看護技術の素晴らしさ		
12	勉強したことを実践に活かしてほしいという願い	学生の熱意への感激・実践に活かしてほしいという願い	学生の将来像をイメージし、看護師に期待する要望を伝える機会
13	学生の熱意にエールを送りたいほどの感激		
14	ストレスが多い看護師	現在の看護師のイメージと看護師への要望	
15	わがまま言う患者も受け入れてほしいという願い		
16	半身半疑でやってきた演習	特段の準備を必要としないSP演習	気軽に演習に参加できる機会
17	気軽な演習への参加		
18	役に立てることへの嬉しさ	役に立つことの嬉しさと演習参加への希望	肯定的な感情を生み出す機会
19	今後もSPとしての参加希望		
20	気持ち良いことをしてくれる演習	気持ち良いことをしてくれる演習	
21	自己の介護体験の語り	介護体験と介護者になった時に役立つ清拭技術の習得	私事として健康について学習する機会
22	介護する際役に立つ清拭の方法		
23	認知症への懸念	自己の健康を振り返る機会	
24	健康のありがたさへの再認識		
25	注意しなくてはならない骨折		

への感謝〉というコードが生成された。「背中を拭くというのでも、こんなにたくさんのステップを踏んでやってるんだなっていうのが分かりました」「入院した経験があるんですが、蒸しタオルを容器に入れてパッと持ってきてくれる。それが当たり前だと思ってた。ここに来たら、全部自分で絞ってやってたからびっくりしました」という発言より、〈学生が清拭を学ぶステップへの驚き〉というコードが生成された。また、「背中をして（拭いて）もらったから、本当気持ちよかった」「温度もよかったし、タオルを背中いっぱいに広げてもらって、それがまたよかった」「血圧も上手に測っていた」などの言葉から、〈学生の看護技術の素晴らしさ〉というコードが生成された。「私たちはすぐ忘れるけど、学生さんたちは脳が活発だから、何でも覚えられて幸せなので、このことを看護師さんの仕事に活かしてくれればいい」「この経験を後で活かしてほしいよね」との言葉より、〈勉強したことを実践に活かしてほしいという願い〉というコードが生成された。「こんなことしてくれるなんて感激した。これからも頑張ってって言いたいくらい、本当に感激したのよ」との意見が出て、〈学生の熱意にエールを送りたいほどの感激〉というコードが生成された。話題は、実際の病院で働く看護師の話になり、「看護師という仕事は忙しいね」「看護師さんは、ストレスが多いでしょうから」という〈ストレスが多い看護師〉というコードが生成され、「患者さんがわがままな人が多いでしょうからね・・・」「入院したらいい

患者さんにならなきゃいけない」との話になり、〈わがまま言う患者も受け入れてほしいという願い〉というコードが生成された。

続けて、演習に参加した動機や参加によってもたらされた意味に対して質問を向けると、「私、あまり分かってなくて、半信半疑で来ました」「私も半信半疑で来ましたよ」という〈半信半疑でやってきた演習〉というコードが生成された。また、「今朝来る時に、もらった手紙読んで来ました。分からんけど、行ってみようと来た」「気軽な感じだった」「ちょっと、見学させてもらおうかなと思って」との言葉より、〈気軽な演習への参加〉というコードが生成された。また、「患者さんじゃなくて、学生さんになんかこうエールを送る方法はないですか」「役に立てるって嬉しい」という語りが聞かれ、〈役に立てることへの嬉しさ〉というコードが生成された。次に、「こんなに気持ち良いことをしてくれるとは思ってもみなかった」という反応があり、〈気持ち良いことをしてくれる演習〉というコードが生成された。「今後も、このような機会があったら参加したい」「健康だったら参加させてもらいたい」との言葉が聞かれ〈今後もSPとしての参加希望〉というコードが生成された。

一方、インタビューを進めると、「痴呆の人の介護は、徘徊するから困るって言ってた。私も経験あるから分かる」「何で、こんなところにいるの？と聞いたら、帰り道が分からんて言ってた」「コンソメだけ生のスパゲッティーにかけておいしいよって言ってた」との〈自己の介護体験の語り〉というコードが生成された。また、「実際に身体を拭いてもらって、やり方とかしてもらうと、自分が介護する時に役に立つと思いました」という反応より、〈介護する際役に立つ清拭の方法〉というコードが生成された。「私たちは、聞いたらもう忘れてるわけよ、全部」「呆けよるんだろうけど、呆けるわけにはいかんもんね」「することなすこと全部（忘れてる）。頭の中には、ここまで出てるけど」と笑い声を交えながらの話題が出て、〈認知症への懸念〉というコードが生成された。さらに、「健康が第一ねとつくづく思った」「介護費が高いとか何とか言われてる。お金払ってもいいから元気がいいね」「認知症の人に接すると、健康でよかったなと思ってね」という言葉が聞かれ、〈健康のありがたさへの再認識〉というコードが生成された。最後に、皆で声を揃え「骨折なんかしちゃいかん」「骨折せんように注意しよう」という声が数々聞かれ、〈注意しなくてはならない骨折〉というコードが生成された。このように、生データから25のコードを得るに至った。

２）コードをサブカテゴリー化する過程

〈学生のSPに対する関わり方への戸惑い〉、〈患者に関わることに慣れていない学生〉、〈学生の緊張への驚き〉、〈学生の説明不足や内容がはっきりしないことへの戸惑い〉、〈学生の看護技術が至らなかった点に対する気づき〉というコードより、『学生の反応より生じたSPの戸惑い・驚き』というサブカテゴリーが生成された。次に、〈学校と病院が離れていることによる大変さへの気づき〉、〈よく勉強している学生への感心〉というコードより、『学習困難な状況でもよく勉強している学生』というサブカテゴリーが生成された。また、〈学生と直に接することで見えた学生の頑張り〉、〈学生の笑顔、優しさへの感謝〉というコードより、『学生の頑張り・優しさに触れたことでの気持ちの変化』というサブカテゴリーが生成された。一方、〈学生が清拭を学ぶステップへの驚き〉、〈学生の看護技術の素晴らしさ〉というコードより、『清拭を学ぶステップへの驚きと学生の看護技術の素晴らしさの体感』というサブカテゴリーが生成された。また、〈勉強したことを実践に活かしてほしいという願い〉、〈学生の熱意にエールを送りたいほどの感激〉というコードより、『学生の熱意への感激・実践に活かしてほしいという願い』というサブカテゴリーが生成された。〈ストレスが多い看護師〉〈わがまま言う患者も受け入れてほしいという願い〉というコードより、『現在の看護師のイメージと看護師への要望』というサブカテゴリーが生成された。加えて、〈半信半疑でやってきた演習〉、〈気軽な演習への参加〉というコードから、『特段の準備を必要としないSP演習』というサブカテゴリーが生成された。他方、〈役に立てることの嬉しさ〉、〈今後もSPとしての参加希望〉というコードより、『役に立つことの嬉しさと演習参加への希望』というサブカテゴリーが生成された。また、〈気持ち良いことをしてくれる演習〉というコードは、そのまま『気持ち良いことをしてくれる演習』としてサブカテゴリー化した。一方、〈自己の介護体験の語り〉〈介護する際役に立つ清拭の方法〉というコードから、『介護体験と介護者になっ

た時に役立つ技術の習得』というサブカテゴリーが生成された。最後に、〈認知症への懸念〉〈健康のありがたさの再認識〉〈注意しなくてはならない骨折〉というコードより、『自己の健康を振り返る機会』というサブカテゴリーが生成された。このように、26のコードから12のサブカテゴリーが抽出されるに至った。

3）サブカテゴリーをカテゴリー化する過程

『学生の反応より生じたSPの戸惑い・驚き』、『学習困難な状況でもよく勉強している学生』、『学生の頑張り・優しさに触れたことでの気持ちの変化』というサブカテゴリーから【学習過程にある看護系大学生を知る機会】というカテゴリーが生成された。次に、『清拭を学ぶステップへの驚きと学生の看護技術の素晴らしさの体感』というサブカテゴリーから【学生の看護技術を学ぶステップを知る機会】というカテゴリーが生成された。また、『学生の熱意への感激・実践に活かしてほしいという願い』、『現在の看護師のイメージと看護師への要望』というサブカテゴリーから【学生の将来像をイメージし、看護師に期待する要望を伝える機会】というカテゴリーが生成された。

一方、『特段の準備を必要としないSP演習』というサブカテゴリーから【気軽に演習に参加できる機会】というカテゴリーが生成された。また、『役に立つことの嬉しさと演習参加への希望』、『気持ち良いことをしてくれる演習』という二つのサブカテゴリーから、【肯定的な感情を生み出す機会】というカテゴリーが生成された。最後に、『介護体験と介護者になった時に役立つ技術の習得』、『自己の健康を振り返る機会』というカテゴリーから、【私事として健康について学習する機会】というカテゴリーが生成された。このように、11のサブカテゴリーから6つのカテゴリーが抽出されるに至った。

Ⅳ　考察

SPへのFGIの内容分析の結果より、【学習過程にある看護系大学生を知る機会】、【学生の看護技術を学ぶステップを知る機会】、【学生の将来像をイメージし、看護師に期待する要望を伝える機会】、【気軽に演習に参加できる機会】、【肯定的な感情を生み出す機会】、【私事として健康について学習する機会】という6つのカテゴリーが抽出された。これらのカテゴリーは、【学習過程にある看護系大学生を知る機会】、【学生の看護技術を学ぶステップを知る機会】、【学生の将来像をイメージし、看護師に期待する要望を伝える機会】からは、看護教育に触れる機会としての意義であると考えた。また、【気軽に演習に参加できる機会】、【肯定的な感情を生み出す機会】、【私事として健康について学習する機会】からは、患者疑似体験をしたことで自身の健康を考える機会としての意義に大別できると考えた。そこで、各々について考察を行う。

1．看護教育に触れる機会としての意義

FGIにおいてSPは、学生が患者に関わることに慣れていないことや過度に緊張していることに驚き、学生の説明不足や看護技術の未熟さに気づきながらも、病院が近くにないことで、学生が分からないことをすぐに確認できる状況にないといった、学生の学習困難を予想していた。そのような状況にあっても、学生はよく勉強しているとSPは評価していた。また、学生の笑顔や優しさに感謝していた。これらは、演習に参加し、学生と直接触れ合ったことによる気持ちの変化であったと考えられる。前回の筆者らの研究[27]においても、SPは学生に対して否定的な反応から肯定的な反応へと変化していたことを明らかにしていたが、今回の研究においても同様の結果となった。この、気持ちの変化は、看護を学習する過程にある看護系大学生を知ることで得られたことであると考えられた。SPは普段、大学の存在は認識していても、学生がどのように学習しているかを知る機会は少ないと考えられる。よって、地域住民が演習に参加することは、地域コミュニティの一部として【学習過程にある看護系大学生を知る機会】につながるという意義を持つと考える。

また、SPからは、学生が清拭を学ぶステップを知ったことによる驚きの声が聞かれた。SPの過去の経験から、病院における清拭は、看護師に蒸しタオルを渡されて身体を拭くというイメージが主流であったとのことであった。しかし、学生が、ベースンに湯を張り、ウォッシュクロスを用いて清拭をするという方法にSPが初めて触れたこと、その方法での清拭がとても気持ちよく素晴らしいと感じたことから、『清拭を学ぶステップへの驚きと学生の看護技術の素晴らしさの体感』となる機会へとつながったと考える。これは、将来看護師になる学生が、

清拭の方法をどのように学んでいくかということを知る機会になったとも考えられ、看護教育における【学生の看護技術を学ぶステップを知る機会】につながったといえる。

一方、SPにとって、普段接している看護師は、ストレスが多いというイメージを持っていた。そのような中にあっても、〈わがままを言う患者も受け入れてほしいという願い〉を抱いていた。今回、演習に参加したことで、将来看護師になる学生に対して、学生の時には笑顔で優しく接することができ、学生の熱意に感激するほどのことであったため、この状態を将来の実践にも活かしてほしいという願いにつながっていると考えられた。このことは、演習に参加したことで【学生の将来像をイメージし、看護師に期待する要望を伝える機会】になったと考えられた。

このように、【学習過程にある看護系大学生を知る機会】、【学生の看護技術を学ぶステップを知る機会】、【学生の将来像をイメージし、看護師に期待する要望を伝える機会】というカテゴリーは、看護系大学の演習に参加し、学生と双方向のやり取りを行い、SP自身が看護教育に直接触れたからこそ得られた意義であると考える。

２．患者疑似体験をすることで自身の健康を考える機会としての意義

SPへのFGIでは、事前の説明書だけでは演習の概要がよく分からず、〈半信半疑でやってきた演習〉、〈気軽な演習への参加〉が抽出された。本演習におけるSP募集の方法は、地域のコミュニティ代表に依頼し参集してもらった方たちであり、SP同士、普段から顔見知りであったり、信頼関係が構築されている状況と考えられた。よって、半信半疑な状況であっても気軽に演習に参加できた状況にあったと推察される。これは、『特段の準備を必要としないSP演習』であったと捉えることができ、負担なく【気軽に演習に参加できる機会】になったのではないかと考えられる。阿部らは、SPが最も難しいと感じる要因を、質問に対してどこまで話したらいいかを判断することと述べている[28]。また、庄村らは、SPが、緊張や患者役を覚える大変さなど困惑があった[29]としていた。加えて、鹿島ら[30]は、高齢者SP養成における課題は、シナリオを覚え、疾患も理解し、学生へのフィードバックも考えるなど負担が生じると指摘している。このように、養成による訓練を伴うSP参加型教育は、気軽に演習に参加すること自体が困難であると推察される。演習に参加したSPは、日ごろ主婦役割を担いながら地域活動を担っている方々であった。そのため、時間をかけたSP養成では参加してもらうこと自体が困難になることが予想される。よって、【気軽に演習に参加できる機会】というカテゴリーは、養成を必要としないSP参加型演習だからこそ得られた意義であると考える。

また、SPは、学生の役に立つことの嬉しさや気持ちのよいことをしてくれる演習と捉えており、今後もSPとして参加したいと述べていた。これらは、演習に対して【肯定的な感情を生み出す機会】としての意義になっていると考えられた。小澤ら[31]は、SP養成のフォローアップ研修において、セミナー参加者である高齢者は、「演技に関して自信がない」、「演技は難しい」との演技に関する不安が高いことを明らかにした。本研究におけるSPは、患者疑似体験をすることへの不安よりも、SPとして今後も参加したいという肯定的な感情を抱いていた。それは、今回のSPに課せられた演技が困難なものではなかったということを意味していたとも考えられた。

一方、SPへのFGIより、SPの大半から自己の介護における様々な体験が語られた。これは、SPの発達段階とも併せ、介護に触れる機会が多いことを意味していると考える。SPは、SP自身が介護する側と介護される側の両者を想定していると考えられた。SPは、演習に参加したことで、自身が介護者になった時に役立つ清拭技術が習得できたと感じていたり、逆に、介護される側にならないように認知症への懸念を示すなど、普段SP自身が考えている健康への価値観を述べる機会となっていた。加えて、骨折患者の疑似体験をしたことで、「骨折なんかしちゃいかん」「骨折せんように注意しよう」という声が数々聞かれ、現在、SP自身が健康でいられる状況に感謝するといった、健康のありがたさを再認識する機会にもつながっていた。今回の演習においては、SPに厳密なシナリオを作成してその通りに患者を演じてもらうというよりは、骨折の70歳代女性患者の状況を設定し、模擬の介達牽引を実施するという工夫を行った。学生の援助や問いかけに対する反応は、SP自身の反応を返してもらうと

いうように状況を設定したことで、SP自身が患者役を疑似体験し、その文脈での反応を学生に返せるからこそ私事として得られた実感であると考えられた。庄村らは、事前演習にSPとして参加する地域住民の経験として、SP自身の励みや成長が数多く挙がったことが地域住民がSPとして演習に参加する意義であるとしている[32]。本研究においても、SPが演習に参加し患者疑似体験をすることで、認知症や骨折をしないように注意しなくてはならないなど、病気の予防にも思いを馳せ、『自己の健康を振り返る機会』につながっていた。これらは、座学ではなく、演習に参加し、地域住民自身がSPとして直接経験したことが、【私事として健康について学習する機会】になったと考えられた。

一方で学生を対象とした筆者らの先行研究[33]では、養成されたSPではなくても学生が、【臨床に近い体験】【SPからの反応をつきつけられる体験】【思い通りにならない体験】や【実体験からの発見】【SPの反応による気持ちの変化】【自己の課題の発掘】や、【視野の広がり】【学習意欲の向上】という様々な学びを得ていたことを明らかにした。このように、ペーパーペイシェントで実施した「看護過程」と「看護過程の展開実習」をつなぐことが目的であった看護学実習前演習において、SPは、養成をしていなくても目的は十分達成できると考えられた。一方において、鹿島らは、養成されたSPは生きがいを感じている[34]と指摘している。また、片倉らは、高齢者の健康の保持増進のためには、地域における活動の場や機会の提供を図ることの重要性を指摘している[35]。本演習では、SP自身の生きがいという価値創生までには至らないが、患者疑似体験をすることは、今までとは違う健康について学習する機会や社会参加を可能にすることにもつながると考えられる。

以上のことより、養成を前提としないSP参加型演習において、【学習過程にある看護系大学生を知る機会】、【学生の看護技術を学ぶステップを知る機会】、【学生の将来像をイメージし、看護師に期待する要望を伝える機会】というカテゴリーは、看護教育に直接触れることで得られた意義であると考えられ、これらは、SPが看護系大学の演習に参加し、学生と双方向のやり取りを行い、看護教育に直接触れたからこそ得られた意義であると考えることができた。また、【気軽に演習に参加できる機会】、【肯定的な感情を生み出す機会】、【私事として健康について学習する機会】というカテゴリーは、SPが演習に参加し患者疑似体験をしたことで、自身の健康を考える機会としての意義があったと考えることができる。

３．本研究の限界と課題

本研究において、研究参加者の中に、前回の研究[36]において研究参加者になった１名が含まれていた。本研究参加者が、前回の体験もふまえ語ってもらうことで、自由なディスカッションと相互作用が容易になると考えたため、今回の調査においても研究参加者としてご協力いただいた。また、研究参加者全てがバランスよく発言し偏りは見られなかったため、調査結果に影響はないと判断した。しかしながら、SPとしての参加回数によって意義が異なることも考えられるため、この点については次の課題と考えている。

また、本研究は、看護学実習前演習という１科目における調査であること、加えて、特定の地域に限定し参加してもらったSPのみを研究参加者としていることから、あらゆる演習に活用できるとは言い難く汎用性に課題が残ると考えている。

Ⅴ　結論

1. FGIの結果より、地域住民がSPとして演習に参加する意義として、【学習過程にある看護系大学生を知る機会】【学生の看護技術を学ぶステップを知る機会】【学生の将来像をイメージし、看護師に期待する要望を伝える機会】【気軽に演習に参加できる機会】【肯定的な感情を生み出す機会】【私事として健康について学習する機会】という６つのカテゴリーが抽出された。
2. 【学習過程にある看護系大学生を知る機会】、【学生の看護技術を学ぶステップを知る機会】、【学生の将来像をイメージし、看護師に期待する要望を伝える機会】というカテゴリーは、SPが看護系大学の演習に参加し、学生と双方向のやり取りを行い、看護教育に直接触れることで得られた意義であると考えることができる。
3. 【気軽に演習に参加できる機会】、【肯定的な感情を生み出す機会】、【私事として健康について学習する機会】というカテゴリーは、演習に参加し患者疑似体験をしたことで、自身の健康を

考える機会としての意義があったと考えることができる。

謝辞

本研究にご協力いただきましたSPの皆様に深く感謝いたします。なお、本研究は、平成24年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究費の助成を受けて実施した。また、第33回日本看護科学学会学術集会において発表を行った。

利益相反

本研究において、開示すべき利益相反は無い。

文献

1） 本田多美枝，上村朋子：看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察　－教育の特徴および効果、課題に着目して－．日本赤十字九州国際看護大学IRR，7：67−77, 2009.
2） 江川幸二，グレッグ美鈴，沼本教子，他：看護大学における地域住民ボランティアを導入した授業の評価　－学生の感想・意見から－．神戸市看護大学紀要，15：57−66, 2011.
3） 藤崎和彦：アメリカの医学教育における模擬患者の導入の現状とその理論．看護展望, 18（8）：892−896, 1993.
4） 山田彩乃：患者の立場から考えた模擬患者の教育内容．看護教育，52（7）：10−515, 2011.
5） 前掲書1）.
6） 原島利恵，渡辺美奈子，石鍋圭子：看護における模擬患者を活用したシミュレーション教育に関する文献検討．茨城キリスト教大学看護学部紀要，4（1）：47−56, 2013.
7） 阿部恵子：医療者教育における模擬患者（SP）の歴史と現在の活動．看護教育，52（7）：502−508，2011.
8） 横井郁子：交流セッションを終えて　これからの展望．看護教育，45（10）：845−846, 2004.
9） 渕本雅昭，渡邉由加利，山本勝則，他：看護基礎教育における模擬患者養成プログラムの実際とその検証．札幌市立大学研究論文集，6（1）：3−10, 2012.
10） 吉川洋子，田原和美，松本亥智江，他：看護教育における模擬患者研修の成果と課題．島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要，4：91−99, 2010.
11） 清水裕子：看護教育におけるSP参加型学習方法の現状と展望．看護教育，45（10）：824−827, 2004.
12） 阿部恵子，鈴木富雄，藤崎和彦，他：模擬患者（SP）の現況及び満足感と負担感：全国意識調査第一報．医学教育，38（5）：301−307, 2007.
13） 前掲書1）.
14） 山崎歩，中村もとゑ，鈴木香苗，他：地域住民参加型の模擬患者養成への取り組みと今後の展望．看護教育，54（12）：1138−1145, 2013.
15） 玉田雅美，澁谷幸，池田清子，他：地域住民ボランティアが参加する看護技術演習の意義　－地域住民の思いと効果－．神戸市看護大学紀要，18：29−38, 2014.
16） 加悦美恵，森本紀巳子：医・看護学生のための模擬患者参加型課外学習活動の試み　－メディカル・コミュニケーション＆スキルス・クラブを開催して－．日本看護学教育学会誌，19（3）：47−56, 2010.
17） 中村惠子，渡邉由加利：看護版OSCEのための模擬患者教育．看護教育，52（7）：528−534，2011.
18） 前掲書9）.
19） 山本直美，久米弥寿子，中岡亜希子，他：模擬患者（Simulated Patient：SP）に求められる資質　－訓練されたSPの語り－．千里金蘭大学紀要，12：69−79, 2015.
20） 杉原百合子，三橋美和，小笠美春，他：看護学部における地域住民参画型教育の取り組みと今後の課題　－模擬患者の養成と看護OSCEへの参画支援を通して－．同志社看護，2：37−44，2017.
21） 阿部オリエ，小手川良江，本田多美枝，他：看護学実習前演習に地域住民が模擬患者（simulated patient：SP）として参加することの意義に関する研究．日本赤十字九州国際看護大学紀要，11：49−58, 2012.
22） 中村惠子：看護OSCE．6-7，東京，メヂカルフレンド社，2011.
23） 北原保雄：明鏡国語辞典 第２版．東京，大修館書店，2011.
24） Grove, S. K., Burns, N., Gray, J. K.: *The*

Practice of Nursing Research Appraisal Synthesis, and Generation of Evidence.（7th ed.）. 2013，黒田裕子，中木高夫，逸見功：バーンズ＆グローブ看護研究入門原著第７版－評価・統合・エビデンスの生成．246−249，東京，エルゼビア・ジャパン，2015.

25）谷津裕子：Start Up 質的看護研究　第２版．98−161，東京，学研メディカル秀潤社，2015.

26）前掲書 21）.

27）前掲書 21）.

28）阿部恵子，鈴木富雄，藤崎和彦 , 他：標準模擬患者の練習状況と OSCE に対する意識：全国調査第二報．医学教育，39（4）：259−265, 2008.

29）庄村雅子，小島善和，茂木陽子 , 他．事例演習に模擬患者（SP）として参加する地域住民の経験．東海大学健康科学部紀要，16：123−124, 2011.

30）鹿島英子，吉村牧子，吉本和樹，他：高齢者 SP（Simulated Patient）養成の課題．関西医療大学紀要，8：20−26，2014.

31）小澤芳子，中村 Thomas 裕美，後藤桂子，他：学内演習に参加する高齢模擬患者の養成プログラムの評価．医学教育，42（4）：225−228, 2011.

32）前掲書 29）.

33）小手川良江，阿部オリエ，本田多美枝，他：看護学実習前演習への模擬患者（simulated patient：SP）導入による学生の学びの実際－学生の体験・気づきから生じた変化に着目して－．日本赤十字九州国際看護大学紀要，12：47−56，2013.

34）前掲書 30）.

35）片倉和子，栃本千鶴，吉村隆：地域におけるグループ活動参加高齢者の身体的・精神的状況と生活習慣および体力の実態．中京学院大学看護学部紀要，6（1）：1−15，2016.

36）前掲書 21）.

Report

Significance of residents' participation as Simulated Patients in laboratory practicum of pre-clinical nursing students (2nd report)

Orie ABE , R.N., MA. Edu.[1)] Tamie HONDA, R.N.,Phd,[1)]
Yoshie KOTEGAWA, R.N., M.N.,[1)] Sakiko NAKAHIRA, R.N.[2)]

The purpose of this study is to clarify the significance of community residents' participation as Simulated Patient (SP) in clinical skills laboratories before nursing students are sent to their first clinical placement. As a result, the following three points were clarified.

1. According to the results of FGI, the significance of local residents participating in the exercise as SP, "The opportunity to know nursing college students in the learning process"and "the opportunity to learn the students' step of learning nursing skills", "image of future students' Opportunity to tell expectations to nurses", "Opportunities to casually participate in exercises", "Opportunities to create positive emotions", "Opportunities to learn about health as privacy". The six categories were extracted.

2. "Opportunities to know nursing college students in the learning process", "Opportunities to learn the students' step of learning nursing skills", "The opportunity to imagine the future image of the student and convey the request to expect nurses"is SP Can participate in the exercise of a nursing college, interact with students interactively, and can be thought of as the significance obtained by directly touching nursing education.

3. "Opportunities for easy participation in exercises", "Opportunities to create positive emotions", "Opportunities to learn about health as private affairs" by thinking about your own health by participating in the exercise and experiencing a patient simulated experience It can be thought that there was significance as opportunity.

Key words: local residents , Simulated Patient , significance, clinical skills laboratories , focus group interview

1) Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing
2) Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing (until 2018)